日本医史学雑誌第三十四巻第四号
昭和六十三年十月三十日発行

# 医史学と私

## ―わが日本医史学会の一代記―

関根正雄

### はじめに

日本医史学会は、世にも有難き学会である。歴史が古い。ご承知の通り日本の医学会では、通し番号で第一号学会である。それでいて、学閥がない。誰でも勉強すれば会員になれる。東洋医学グループとか、シーボルトグループとか、グループはできるが、リタイアーも自由である。会員たちには壁はない。

### 入会する前のこと

筆者が会員になったのは、昭和三十六年。もう五十歳を越えた年齢であった。医師でありながら、この学会のあることを知ったのはその頃である。

学会といえば、耳鼻咽喉科学会には、大学を卒業した年に入らされた。東大の岡田和一郎先生が大御所で「日本人は魚をくうので咽頭の異物が多い」と地方会で追加された。偉い学会でも、通俗的なことがまかり通るものだとびっくりした。新米で何も知らないくせに。

昭和七年の年の暮に、大学の医局へ南洋庁から求人の申し込みが来た。「どうしてそんなとこへ行くんだい」「おやじがね、南洋で仕事していたんだ」。三年余りパラオ島にいたら帰りたくなって、学校の寄生虫学教室に、無理に入れてもらった。そして寄生虫学会にも入れてもらった。

熱帯病をやるのかと思ったら、小泉丹先生の下で、毎日、豚の回虫の腹を裂く仕事だった。小泉先生には、どなられたことは四年間にいちどもなかったが、部屋に呼ばれると、立っている脚がぶるぶるふるえた。しかし、臨床を離れたのは天国の生活だった。「今週の武蔵野館の映画いいぞ」「来年の総会は岡山だ」「満洲で戦さを始めやがった」「あれっ、研究生が召集された」。

昭和十四年、南洋で儲けてきた資金が底をついてきた。論文は大分できてきた。長男が幼稚園に通い出した。赤紙が来ないように、真剣に神様を拝んだ。「キミは就職決まっているのか」「はい、中島飛行機会社に入れてもらいます」。

その年の夏、太田の中島飛行機病院に入った。さあ、耳鼻科のやり直しだ。「キミ、臨床の間に、新設の海軍機の病院の設計をやれ。青写真は少しできてる」「眼科部長先生、新しい病院の眼科外来、三尺ほど小児科に譲っていたゞけませんか」「いやだ」。

何とか新病院の設計図ができた。地鎮祭が行われて、参列者が多かった。そこへ私に赤紙の召集令状がきた。「こんちきしょう、折角、耳鼻科が手に戻ってきたのに」。仕方がない、甲種合格の予備役軍医少尉だもの。飛行機病院に入って、まる一年の時である。

昭和十五年。召集は不幸中の幸いで、行き先が満洲国のソ連国境の「三等陸軍病院」。官舎もあるし旅団の駐屯者も多い。院長以下医師六人編成。「貴官は耳鼻科だそうだな、家族の耳鼻科も診てやってくれ」「はい、病院長殿」。

すぐに、第二次世界大戦に突入した。でも初めの頃は戦況がいいので呑気だった。仏教の本を注文して、内地から頻繁に送らせた。分らないことがあると「患者の坊主を集めろ」「はい少尉殿、坊主三人、集合しました」。

病院長の考え。「この少尉、死ぬ覚悟だな」実はそれはうそ。仏教は面白いから読んでいるだけのこと。戦況が厳しくなると、病院の同僚は、どんどん野戦病院に転属して出ていく。「あの野病の部隊、海上でやられたそうだ」「北方送りはカムチャッカなど、死にに行くようなものだ」。

病院の定員は減る一方で、ついに医師は院長以下三人。患者の数は、少しも変わらない。「関根中尉は外科だ」「下腿切断の患者が入った、中尉ひとりでできるか」「はい、何とか、部隊長殿」。三等病院でも、部隊長は患者を総回診だけしか診ない。耳鼻科などどこかへ行ってしまった。

終戦後昭和二十三年、ソ連から帰還した。四十三歳になっていた。「太田病院では耳鼻科ができたそうだ」。昭和二十四年には、耳鼻科医師、太田病院長になる。終戦から内部でもめごとの続いた挙句である。「何でもいいや、みんなで仲よくやろうよ」。

やがて、「竜見先生（現・伊勢崎医師会長・伊勢崎総合病院長）これから耳鼻科ひとりでやってください。ネーベンは群大にたのみます。」昭和三十一年、病院は総合病院になる。やっとひまができた。学会出席のついでに「わしは二日伸ばして帰る。旅費をつけて置け」。五十歳を過ぎてしまった。「大鳥先生、日医史の会に入れてください」。昭和三十七年、ここに、フレッシュマンヂヂイ誕生した。

## 入会してからのこと

日本医史学会に入ったら、若い先輩杉田暉道先生がおられた。看護教科書の石原明先生もお元気だった。ものすごく博識で少女のような酒井シヅ先生もおられた。杉田仏教に入門した。「南海寄帰伝、読んでごらんなさい」。五世紀末、僧義浄の述である。医史学とは時代も古人も、いちどきに身近かに寄ってくるおそろしい学問である。

神田の仏教書店小林に出入りした。あんまりしつこくくい下がるので、店主（先代）から「ご同業ですか」ときかれ

た。大鳥先生から命令が出た。「地方会によく来るけどそろそろ何か出しなさいよ」。昭和四十五年、ヂヂイの初舞台、地方会に瑞方面山の『釈氏洗浄法』を出した。種本は本郷の古本屋で八〇円の和本である。当時としても安売りである。この本には、巻末に「趙宋鎮江府金山寺東司ノ様」がのっていて、坊さまの便所の平面図である。緒方富雄先生がびっくりしてくださった。

その後、理事長の小川鼎三先生にも拝眉できるようになった。「そうか、キミは南洋庁でジュゴンをつかまえたか」「ジュゴンの耳の骨、持って帰りました」「そうか、また海産動物やってみたくなった」「先生、それは日医史が困ります」。

昭和四十八年の日医史総会は、第十六回蘭研大会と合同だった。演題が解体新書に関するものと限定された。仏教にばかりかじりついていたので困った。

しかし考えてみたら、困ることはない。中学生だったとき、毎日市電に乗ったのは山谷町だった。蘭学事始に、「山谷の出口の茶屋」という言葉がある。出口にも入口にも、今は庶民の家がいっぱいでわからない。目と鼻の先が小塚原で、学校帰りに石炭屋の同級生とよく散歩したところだ。小塚原といったって自分の地元じゃないか。

初めて仏教から離れて、地誌を勉強した。図書館と教委とを巡った。参考になったり、まとが外れたり。抄録の提出で「…小塚原の洪水は泥を積もらせることなく、却って地表を洗い、蘭学事始には、刑場に野ざらしとなりし骨どもを拾ひとりて、とある。」書き終えたら、何だか悲しかった。小塚原の二万何千何百の骨の野郎。こうして一般出題「小塚原と山谷との管見」ができて、総会は銀座の大きなホールで開かれた。

たしか、次の年の順天堂大学の地方会のとき、理事長先生から千住の回向院で、記念碑建て換えの行事があると報告された。一九二二年に有志の奨進医会が建てた記念碑が戦災で壊れたままになっている。その再建をして、現地で講演会を開く。先生はゆっくり壇を降りて来られて「総会のときの話しをしてください」。

これはまったく青天の霹靂だった。いい方の霹靂で、先生のお顔が菩薩さまに見えた。お慈悲で小塚原の地誌を救いあ

げてくださったのだ。感激だった。回向院の会は、理事長・緒方先生はじめ住職・学会の名士の記念講演である。雑魚のとと交りは云うも愚かの光栄である。

一九五九年三月四日回向院で建碑式は無事に済んだ。講演会場に席を移して二十人余りの参会者で、講演は型のごとく進行した。ところが講演と質疑が長びいて夜になってしまった。最後の演者のときは、七時二十分を廻ってしまった。小塚原の地誌よりも夕食の時間が過ぎている。用意した四十五分の原稿を放り出して、すごい早口で十分くらいで済ませた。回向院が火事場になったような講演だ。光栄も感激も吹き飛んだ。しかし、わが一世一代の仕合せであった。憮然となってはいたが、夜の山谷のドヤ街を独りで歩いて帰った。

この年、日本耳鼻咽喉科学会に退会届けを出した。雑誌や資料が送られてくるので気が散っていけない。西端驥一先生から「思い切ったことするねえ」といわれた。昭和四十三年、総合太田病院も退職した。

昭和五十一年に、「仏典の中の耆婆とその医療」を報告した。仏典にその症例が八例あった。薬王樹の機能がX線のようであったり、麻酔法がかんたんに飲酒でできたり、神秘的なこともでているが、合理的なものも多い。別冊を慶大客員教授小野譲先生にお送りした。「二千年前の業蹟を調べるなんてたいへんなことだ」と手紙をいただいた。先生はアメリカのジャックソンの高弟で、日本にジャックソンの内視鏡を広めて勲章をお受けになった。耳鼻咽喉科史の本もお書きになった。

## 晩年のこと

個人的なことではあるが、昭和五十年、大塚恭男先生からお電話をいただいた。「独協医大の講義やってくれませんか」。看護史の講義を二〇年ほど手がけていたので、喜んでおひき受けした。看護史とちがって大役であった。Major のテキストをひっ張り出して読んだ。老境に入っているので覚えられない。努力して上下二巻を抜き書きした。

初年度、それを見ながら話した。学生から文句がきた「抜き書き読むのでちっとも面白くない。」二年目から読まないことにした。その代り、十二駒の講義の最後に「諸君は、私の話は面白くなかったろう。医学史ってものは、すぐに役に立つものではない。卒業して十五年か二十年たって、医学史が大切なことに気がつくだろう。そうしたら改めて勉強しろ。そのときは、居眠りしていた諸君でも、何も聞かないものよりは役に立つ。それまで年寄りは面倒見切れない。私は、墓場の中からじっと見守っているぞ」。気がついたら死んだ猿翁の戌辰戦役の芝居のせりふになっていた。学生たちはみんな拍手して笑った。

これに味をしめて毎年このせりふを続けた。ある年、知らないうちに、気管支食道科の日野原教授が聞きにこられた。「せんせいの云う通りです」と云ってくださった。教授は、日本で初めて、耳鼻科から独立した内視鏡の教室をひらかれたかたで、日本医史学会の会員でいらっしゃる。昭和五十九年、私は独協を退いた。あとは日本医史学会の蔵方宏昌先生が引き受けてくださった。

昭和五十八年と五十九年、伝手があって、ロンドンに行ってみた。エジンバラに廻ったのがよかった。あとで地方会に、ドクターノックスとバークスの事件を報告した。日本の解剖・外科ではあまり有名な事件ではない。それをペーパーに直して『日本医事新報』にのせた。この赤毛ものは、私の死亡広告か遺言状のつもりだった。

まだ死なないで生き延びている。もう一度ヨーロッパに行きたい。昭和六十三年で八十三歳。途中の飛行機のなかの小便がこわい。向うに着いてしまったら、ブダペストに行きたい。

結びのことば

あと、ほんのちょっぴり余命が残っているようだ。若い会員のかたがたが、うらやましい。

（総合太田病院高等看護学院
日本医史学会名誉会員）